

## S3の4章前半 日本語翻訳

---

### 【第1章：裁判の準備】

シオン：よし、これだけ準備すれば裁判の準備は完璧だ。

シオン：聞いた話では、検事は妖精王国の「警備隊長」らしい.....

シオン：ふん.....妖精王国の忠臣で、軍事方面では定評がある。

シオン：おそらく検事を引き受けた理由も、エルフィン女王のためだろう。

シオン：そして裁判長はベリータ女王。エルフィンの姉にして、魔女の女王として賢明で慈愛深い方だ。

シオン：可愛がっている妹がいるだけに、ヴィヴィの行動を理解してくれる可能性も高い。

シオン：過去の判例を見ると厳罰を下した事例もあるけど、最近はそんなことはなかったし.....

シオン：へっ、よし！ 法廷でどんな言葉が飛び交っても反論する準備はできてる。

シオン：ヴィヴィの助けになりそうな証人も手配したし！

(コンコン！)

イード：あの、お姉ちゃん.....裁判の準備はうまくいってる？

シオン：あ、イード来たの？ うん、順調だよ！

イード：そうなんだ、よかった。

イード：四番目のお姉ちゃんは最近どう？

イード：今まで四番目のお姉ちゃん、姉妹の面会も拒否してたじゃない。

シオン：それはヴィヴィが裁判が終わるまで、誰にも会わないって言ったから.....

シオン：ヴィヴィも気持ちが複雑なんだろうね。

イード：まあ、そうだよな.....

イード：お姉ちゃんは大丈夫？ 最近、裁判の準備で忙しかったでしょ。

イード：何日も夜更かしして資料を集めてたんでしょ。

イード：頑張るのはいいけど、無理しすぎないでね。

シオン：大丈夫、大丈夫～

シオン：裁判の準備をしていたら、やりたいことが出来たんだ！

イード：やりたいこと？ それって何？

シオン：私たち七姉妹がまた集まって、一緒に楽しく笑っておしゃべりすることだよ。

シオン：エピカが歌って、私たちは笑っておしゃべりして、長姉はまた変なこと言うでしょ？

シオン：クロエは私たち姉妹のために服を仕立ててくれるだろうし。

シオン：その服を着て一緒に素敵なレストランで、テーブルを囲んで乾杯するんだ！

シオン：レストランが嫌なら、教主の宴会場にみんなで行ってもいいし！

イード：私が切実に夢見ていた光景だよ。

イード：いつか夢で見たような気もする。

シオン：今回の裁判さえ終われば、必ずみんなと一緒にやるんだ！

イード：もちろんだよ、お姉ちゃん！ みんなで一緒にしよう！

イード：あ、そういえば。別に話したいことがあるって言ってなかった？

シオン：あ、それがつまり.....

シオン (心の声)：う.....まだ迷うな。

シオン (心の声)：末っ子を探して会いはしたけど.....よりによって記憶を失っていて.....

シオン (心の声)：うーん、この話をどう切り出せばいいか.....

シオン (心の声)：末っ子の消息を伝えるには時期尚早かな？ 裁判が終わってから話そうか？

シオン (心の声)：.....それでも一応、ほのめかすくらいはした方がいいかな.....？

シオン：それがつまり.....

(コンコンコン)

教主：シオン、そこにいる？

シオン：あ、教主？ どうしたの？

教主：あ、その裁判に関して伝えたい話があって。

シオン：ちょっと待って！ すぐドアを開けるから。

### 【シオンの部屋】

教主： イードもいたんだね。元気だった？

イード： お久しぶりです、教主様。私は元気にしてましたよ。

教主： 元気そうで何よりだね。

シオン： こんな遅い時間にわざわざ来るなんて、どうしたの？ 最近忙しいだろうに……！

シオン (心の声)： こうして来たということは、大事な話なんだろうな？

イード： 二人でゆっくり話してください。

教主： いや、気にしないで。僕たちが外に出て話すよ。

シオン： その方がいいかな？ すぐ準備するね。

### 【モナティアム大通り】

教主： 裁判の準備はうまくいってる？

シオン： 最善を尽くすしかないね。

シオン： 決して後悔が残らないように。

教主： ウイには会った？

シオン： うん。末っ子には会ったよ！

シオン： 最初は半信半疑だったけど、口癖のように「幸せ」について話すのを見て確信が持てたよ。

シオン： 私たちが探していた末っ子、ウイに間違いない！

教主： そう？ それはよかった。

教主： 末っ子まで見つかったなら、七姉妹全員が揃えるね。

シオン： ヴィヴィの裁判さえうまく終われば！

シオン： ところで話があるって言ってたけど、良い知らせ？ 悪い知らせ？

教主： うーん、ちょっと微妙かな。

教主： ヴィヴィの裁判で裁判長が変わったんだ。

シオン： 裁判長が変わった？ 誰に？

シオン： 裁判長はベリータ女王のはずだったのに？！

教主： 今回裁判を担当するのはマカシャだよ。

シオン：これは予測できなかったな.....

教主：マカシャが自ら進んで今回の裁判を引き受けることにしたらしい。

教主：ウロスに関わる件だから、責任を持って決着をつけたいんだって。

シオン：マカシャって魔女、どんな魔女なの？

教主：冷徹で理性的だね。ベリータのように寛大ではないよ。

シオン：検事はそのまま？

教主：うん。検事はブランがそのままやるよ。

シオン：そっか.....教えてくれてありがとう、教主！

教主：大丈夫？

シオン：裁判長がマカシャでも変わることはない。最善を尽くすよ。

シオン：明日、法廷で会おう、教主。

---

## 【第2章：予想外の裁判】

ブラン：.....以上の理由から、私は被告人ヴィヴィを極刑に処すべきだと考えます！ 以上！

マカシャ：検事側、先ほど極刑とおっしゃいましたが.....魔女王国の極刑である「穴落としの刑」を要請されるのですか.....？

ブラン：はい、必要であれば喜んで.....！！

ブラン (心の声)：3人1組で罪人を120度の間隔で囲み、1日3交代、120年間デコピンの刑もいいかもしれな！

マカシャ：うーん、検討してみましよう。

マカシャ (心の声)：重大な案件である以上、穴落としの刑を下すこともあり得るか。

シオン：ちょっと待ってください！ 異議あり——！！

ブラン：何の異議があるというのですか？

マカシャ：被告人側の異議申し立て？ 認めます。発言してください、被告人側。

シオン：大丈夫だよ、ヴィヴィ。私に任せて。

シオン：調べたところによると、穴落としの刑はず〜っと昔、スノーキーの「不法豆乳流通事件」以来下されたことのない極刑です！

ブラン： それだけ罪が重いと判断されるからこそ、極刑を要請したまでです。

シオン： 女王が不在の際にその座を奪い取った者！ 啓示を受けたと主教を自称し、エーリアスの平和を乱した者！ もっともらしい口実で王冠を譲り受け、女王の座を篡奪した者！ その三名の中で、誰一人として魔女王国の穴落としの刑を受けた者はいません！

ブラン： ゲホン！ 裁判長、現在弁護側はまったく関係のない事件を持ち出して事件の本質をぼかしています！

シオン： 敬愛する裁判長。私は事件の本質をぼかしているのではなく、既存の判例について話しているのです！

マカシャ： 弁護側の意見、参考にします。

マカシャ (心の声)： うーん、穴落としの刑は当時好き勝手だった魔女たちへの警告の意味で女王様が下された極刑。今の時代に施行するには無理があるのは事実だが.....ウロス事態の深刻さを考えると.....

教主 (心の声)： 普通の事件事故なら、フリックル、ジョアン、ブランの時のようにうやむやにボランティア活動で済ませただろうが.....

教主 (心の声)： ヴィヴィが起こした事件は.....彼女たちとは違い、明白な悪意から始まったものだから.....

教主 (心の声)： 正直、私にもわからない。ヴィヴィの処遇をどうすべきか.....それが今回の裁判に私が直接介入しなかった理由でもあるし。

マカシャ： 検事側、尋問を続けてください。

ブラン： まず事実だけを指摘しておきます。ヴィヴィは毎日シュロを訪ね、教主様について警告していました。

ブラン： そして贈り物をすり替え、毒を塗った短剣でシュロがディアナに危害を加えるように誘導しました。

ブラン： その過程で和解の場を設けた我らが「可愛い女王様」がどれほど大きな傷を受けたことか！

シオン： え？

シオン (心の声)： 我らが可愛い女王様？

ブラン： 我らが「か弱く幼い女王様」があの時どれほど大きな心の傷を負われたことか?! このブラン、そのことを思うたびに胸が引き裂かれる思いです!!

ブラン： うっっ！ あの時女王様を思うと今でも涙が.....!!

ブラン： だからこそ、私は被告人を厳罰に処すべきだと考えます！

シオン： 裁判長！ 現在検事は個人的な感情に訴えています！

マカシャ：認めます。検事側、個人的な感情に訴えることはお控えください。

ブラン：はい、留意いたします。

マカシャ：続けて尋問する内容があれば尋問してください。

ブラン：裁判長、ウロス事件に関与した者の法廷出席を要請します。

マカシャ：許可します。関係者は法廷に出席してください。

(足音)

フリックル：魔女王国、ベルティエンの補佐官フリックルだ。

マカシャ：補佐官、法廷では敬語を使ってください。

フリックル：おい！　そういう態度で来るのか？　マカシャ？！

マカシャ：ここは神聖な法廷です。引きずり出しますよ～

フリックル：.....うう、わかりました.....

フリックル (心の声)：マカシャのやつ！　まったくもう！

マカシャ：補佐官、証人宣誓をしてください。

フリックル：宣誓、私フリックルは良心に従い、隠したり付け加えたりすることなく事実のままを述べ、もし嘘をついた場合は偽証の罰を受けることを誓います。

ブラン：補佐官は今回の事件の深刻さについて証言されます。補佐官、その説明をお願いします。

フリックル：まず、今回の争点の深刻さについて申し上げます。被告人が起こした事件は.....単に教主を毘にはめようとしたものではありません。

マカシャ：「教主様」と呼んでください。

フリックル：.....単に.....「教主様」を毘にはめようとしたものではありません。

フリックル：被告人はシュロを孤立させ、ウロスの墮落を目標としていました。

フリックル：これはひいてはエーリアスの滅亡を目標としていたと言えるでしょう。

シオン：裁判長、証人の陳述は推測に基づいています！

シオン (心の声)：真実かどうかとは関係なく、ただの推測にすぎないわ。

マカシャ：認めます。事実に基づいて述べてください。

フリックル：.....わかりました。

フリックル (心の声)：は？あいつ、思ったより鋭いじゃない？

フリックル： 被告人の行動はウロスの再臨を加速させる結果を招きました。

フリックル： 運命論が絡んでいるとはいえ、準備された状態で事件を迎えるのとそうでないのには大きな違いがあります。ウロス事態の被害が拡大したのも被告人の行動のせいです。

フリックル： 裁判長にはこの点をお汲み取りいただきたい。以上です。

フリックル (心の声)： そのまま翼を縛って、気持ちよく穴に放り込んでやれ！

シオン： 裁判長！ ウロス事態と被疑者が起こした事件には区別が必要です！ 今回の事件がなかったとしても、ウロス事態に備えられたという保証はありません！

マカシャ (心の声)： ふむ.....ヴィヴィの行動がウロスの再臨を早めたのは確かだ。うーん。しかしそうでなかったとしても、私たちがウロス事態に備えることができただろうか？

マカシャ： 検事側、尋問を続けてください。

ブラン： 裁判長、追加の証人を要請します。

マカシャ： 許可します。

(足音)

シオン： な、何?! あいつは?!

ミュート： こんにちは。

シオン： ちょっと！ なんであいつがここに出てくるの?!

ブラン： 事件の直接的な関係者として、まず自ら証人を申し出てくださった勇気に感謝を表します。今回の裁判で、自ら証人を申し出た理由を明かしていただけますか？

ミュート： 客観的な事実のみをお伝えするために出席いたしました。

マカシャ： 証人、宣誓してください。

ミュート： 宣誓、私ミュートは良心に従い、隠したり付け加えたりすることなく事実のままを述べ、もし嘘をついた場合は偽証の罰を受けることを誓います。

ブラン： 真実をすべての前で話していただけますか？

ミュート： まず自己紹介からさせていただきます。私はモナティアムの元諜報班長にして、現教団のデジタルセキュリティ担当者、ミュートです。

ミュート： ヴィヴィが毎晩シュロの病室を訪ねて贈り物をすり替えたのは99%事実です。それに関して私と会話を交わした記録もあります。

マカシャ： 証拠を提出してください。

(証拠映像1：モナティアム裏路地)

エレナ？（変装したミュート）：そのすべての情報が私の世界を完成させるのよ。

ヴィヴィ： エルフたちは.....時折わたくしを驚かせますのね。

エレナ？（変装したミュート）：そんなに褒める必要はないわ。あなたが毎晩シュ口の病室を訪ねてあいつを刺激しなければ、始めることすらできなかった方法なんだから。

ミュート： 当時のミュートがヴィヴィと会った時に録画しておいたものです。該当映像のエレナはホログラムで再現した私の姿です。

ミュート： 私の能力の中で、ホログラムを使って誰かに変装できることは皆さんもご存知でしょう。

シオン： ヴィヴィ.....あれ、本当なの？

ヴィヴィ： .....本当よ.....

ブラン： ご覧の通り、今回の犯罪は計画的でした。

マカシャ： 証拠映像を確認しました。

シオン (心の声)： くっ.....あいつがなぜここに.....これは予測できなかった.....！！

ブラン： ヴィヴィが「贈り物をすり替えた」ことも事実です！ 証人、もう少し詳しい内幕を話してください。

ミュート： 該当事件は計画的に行われました。しかしその計画はヴィヴィが主導したものではありません。

マカシャ： 被告人が主導したものではない.....？

ミュート： はい。これに関する証拠資料を提出します。

(証拠映像2：モナティウム裏路地)

ネル？（変装したミュート）： 女王様とそこまでひどく喧嘩なされたのなら.....たぶん.....何か贈り物を持って行かれたほうがいいのではないのでしょうか？まずは気持ちのしるしを、目に見える形で示すのがよいと思います。

ネル？（変装したミュート）： エシュールのパン屋で素敵なケーキを一つ買っていけば、マリーも許してくれるはずです。

ネル？（変装したミュート）： 妖精女王が和解を仲介する確率：確率上昇。89%。

ネル？（変装したミュート）： 妖精女王が贈り物を準備する確率：96%。

ヴィヴィ： では、その贈り物が.....あの子蛇の病室の前に置かれていたのですか.....？

ラン？（変装したミュート）： うん。そしてその時、僕が君に連絡したんだ。箱の中のケーキを君のあの.....短剣とすり替えるって。

ラン？（変装したミュート）：水銀で形成された短剣は時間が経てば形が崩れて消え……その短剣に塗られたトリカブトの毒だけが残り、すべての疑いは狼に向かうことになる……誰も君がそれをやったとは気づかないから、完璧だろ？

ヴィヴィ：まったく……恐ろしいやり方ですこと。

ミュート：裁判長、該当映像のネルとランも私がホログラムで変装した姿です。

ミュート：ご覧の通り、該当事件を主導し計画したのは……まさに私です！

シオン：はあ……？

シオン（心の声）：何？ あいつ……ヴィヴィに有利な証言をしてるじゃない？

マカシャ：該当映像を証拠として提出する理由は何ですか？

ミュート：真実を伝えたいからです。

マカシャ：わかりました。証人、その他に言いたいことはありますか？

ミュート：ありません。

ミュート（心の声）：これ以上言うことはない。ヴィヴィがエーリアスの滅亡を前提に事を実行した確率について騒いだところで、あくまで推測の領域だから。

マカシャ：うーん～では、このあたりで……裁判が長引いていますので、休廷時間を設けることにします。

マカシャ：休憩後、定刻までに法廷にお戻りください。

---

### 【第3章：憎悪の連鎖】

シオン：ヴィヴィ——！ よかった！

シオン：ミュートの奴が映像を流した時は私もヒヤッとしたよ！

シオン：でもあいつが自白したから、あなたに有利に働くはずだよ！

ヴィヴィ：……

ヴィヴィ：……どうしてなの？ どうしてここまでのの？

ヴィヴィ：本当はお姉ちゃんもわかってるでしょ。

ヴィヴィ：誰が見ても私が悪い側だって。弁護する価値もないじゃない。

シオン：……私たちは家族じゃない……

シオン： もともと家族同士は最後までお互いを包み込むものでしょ～

ヴィヴィ： 家族同士はそうするものだって？

ヴィヴィ： .....お母さんは私たちを捨てたじゃない.....

ヴィヴィ： 世界中の誰が何をしても、お母さんだけはそうしちゃいけなかったのに！

シオン： .....理由があったはずだよ.....

シオン： 誰でも最初は不器用で、未熟で、失敗も多いでしょ.....

シオン： お母さんも、お母さんになるのが初めてだったはずだから。だからそうしたんだよ。

ヴィヴィ： 理解できない。理解したくもない！

シオン： そんなあなたの気持ち、わかるよ、ヴィヴィ。

ヴィヴィ： .....

ヴィヴィ： これから私はどうすればいいの？

ヴィヴィ： わからない、何をすればいいのか到底.....

ヴィヴィ： 復讐のことばかり考えてた.....その大義名分ですべてを投げ捨てたのに.....

シオン： .....ヴィヴィ、末っ子がいつも言っていた言葉、覚えてる.....？

ヴィヴィ： .....

シオン： 幸せになるう、私たち。

ヴィヴィ： .....私は幸せだったことなんてない.....

ヴィヴィ： あの荒野で目覚めてから、たった一日も幸せだったことなんてないのよ！

ヴィヴィ： 幸せが何だったかさえ忘れてしまった！

シオン： 一緒に.....一緒に探してみよう！

シオン： 戻れるはずだよ。幸せだった頃に。

シオン： 私たち姉妹がみんなで集まって笑っておしゃべりしてた時は幸せだったでしょ。

ヴィヴィ： .....

シオン： 約束するよ、世界中のみんながあなたを見捨てても、私はそうしないって。

シオン： だから一緒に戻ろう。幸せだったあの頃に！

マカシャ： さて、休廷時間を終わります。裁判を再開します。

マカシャ： 検事側、引き続き発言してください。

ブラン： 先ほどと続く論旨ですが。

ブラン： 今回の事件は、これまで言及されてきたフリックル、ジョアン事件とは異なる解釈がなされるべきだと考えます。

ブラン： あの時の事件には一種の大義名分があったと見ることができます。

ブラン： 混乱するエアリアスに秩序を正すという大義名分！

ブラン： そして司祭として世界樹の啓示に従うという大義名分！

ブラン： 自らの信念を実行したと見ることができます。

ブラン： もっとも、その信念は間違っていました。

ブラン： 一方、被告人の行跡にはいかなる善意も見出せません！

ブラン： 被告人は個人的な恨みに他者を利用しました！

ブラン： その過程で多くの被害者が生まれたことは明白な事実です。

ブラン： シュロ、ディアナ村長、そして女王様まで！

ブラン： これらの理由から、被告人を極刑に処すべきだと考えます。

ブラン (心の声)： ふん。今度は逃げられまい。

シオン： .....

シオン： .....こう来ることは予想してた.....

シオン： ヴィヴィが犯した罪を否定するつもりはない。

シオン： しかし裁判長、被告人の罪質を論じる前に、被害者の意見を聞きたく、証人の法廷出席を要請いたします。

マカシャ： はい、許可します。

マカシャ： 証人、入ってください。

ウロス (シュロ)： あ、こんにちは。

ブラン (心の声)： シュロ？ 被害者を直接連れてくるとは、何を考えているんだ？

マカシャ： 証人、宣誓をしてください～

ウロス (シュロ)： 宣誓、私シュロは良心に従い、隠したり付け加えたりすることなく事実のままを述べ、もし嘘をついた場合は偽証の罰を受けることを誓います。

シオン： 証人は事件後、被告人に会ったり連絡を取ったことはありますか？

ウロス（シュロ）： はい、ウロスが再臨する前にヴィヴィに会ったことがあります。

シオン： その時の状況を説明していただけますか？

ウロス（シュロ）： まず、皆さんにわかっていたいただきたいことがあります。

ウロス（シュロ）： ヴィヴィはウロス事件の加害者である前に、被害者でもあるという点です。

シオン： 加害者である前に被害者とは、よく理解できませんね。

シオン： もう少し詳しく説明していただけますか？

ウロス（シュロ）： ヴィヴィにはエダという姉妹がいました。

ウロス（シュロ）： ウロスはそのエダを害し、結局エダは元の記憶と自我を失ってしまいました。

マカシャ： 証人、それは事実ですか？

ウロス（シュロ）： はい、事実です。

ウロス（シュロ）： 私はヴィヴィの復讐を理解できます。

ウロス（シュロ）： むしろ私がヴィヴィに許しを請いたいほどです。

シオン： 被害者がなぜそのようにお考えになったのですか？

ウロス（シュロ）： 私がウロスの罪をすべて背負うことにしたからです。

シオン： 被害者はヴィヴィの処罰を望んでいないという意味に解釈してよろしいですか？

ウロス（シュロ）： はい、単刀直入に申し上げます。

ウロス（シュロ）： 私はヴィヴィの処罰を望みません。

シオン： 被害者はヴィヴィを許すということですか？

ウロス（シュロ）： はい、私はヴィヴィをすでに許しました。

シオン： そのような勇気ある選択をした理由を聞かせていただけますか？

ウロス（シュロ）： 憎悪は憎悪を呼ぶものです。

ウロス（シュロ）： 私が断ち切りたいのは憎悪の連鎖です。

ウロス（シュロ）： ですから裁判長に、どうか寛大な処置をお願いいたします。

ヴィヴィ： .....

ヴィヴィ (心の声)： 混乱する..... どうして私を許すと言うの.....

ヴィヴィ (心の声)：いっそ私に怒鳴って、罵倒してくれた方が気が楽だったのに.....

シオン： .....ヴィヴィは後悔しているのかな.....

シオン： 以上、被害者の意見を聞きました。

シオン： 裁判長、シュロ以外にディアナ村長の嘆願書を提出いたします。

マカシャ： 嘆願書を提出してください。

ブラン (心の声)： 嘆願書だと？ なかなか準備してきたな。ディアナ村長が嘆願書まで書いてくれたのか？

マカシャ： 弁護人側、嘆願書を提出するに至った経緯を説明してください。

シオン： ディアナ村長もまた、憎悪の連鎖を断ち切りたいというシュロの意見に積極的に同意しました。

シオン： これを受けてディアナ村長が快く嘆願書を作成してくださいました。

マカシャ： 被害者に関する嘆願書の提出、確認しました。

シオン： 以上です。敬愛する裁判長。

マカシャ： 検事側、引き続き尋問してください。

ブラン： 裁判長、検事側も被害者の法廷出席を要請します。

マカシャ： 許可します。

エルフィン： うーん、ここに立てばいいの？

ブラン： はい、そこにお立ちいただければ結構です。

ブラン： 女王様、今からあの時の率直なお気持ちをお話してください。

ブラン： 女王様は、シュロとディアナ村長に和解の場を設けたことがありますか？

エルフィン： うん、あの時はそれでいいと思ったから.....

ブラン： 女王様は、ヴィヴィの策略で事が狂った時、どんなお気持ちでしたか？

エルフィン： そ、その時は正直.....すごく傷ついたよ。

エルフィン： で、でも今は全部うまくいったから、よかったと思ってる！

ブラン： 女王様は傷つかれた分、被告人に相応の法的裁きがなされ、正義が正されるべきだということに同意されますか？

エルフィン (心の声)： 被告人？ 相応の法的裁き？ 正義？

エルフィン (心の声)：う、難しい言葉でちゃんと理解できない……！

エルフィン： え、えっと、その、つまり……

ブラン： 女王様～質問が難しければ「はい」「いいえ」でお答えいただければ結構です。

シオン： 裁判長！ 今、検事側は誘導尋問をしています！

マカシャ： はい、認めます。検事側、注意してください。

ブラン： ……失礼しました。注意いたします。

ブラン： 女王様、あの時のお気持ちを気楽に～正直にお話しいただければ結構です。

エルフィン： 正直に？

エルフィン： じ、じゃあ正直に言う？

エルフィン： 適当にボランティア活動でもやらせればダメなの？

ブラン： 女王様～??

マカシャ： うーん～???

エルフィン： だって～ピラの時もそうだったし、ジョアンの時もそうだったし～

エルフィン： さっき見てたら穴の話が出てたけど……

エルフィン： 正直、穴落としの刑はちょっとアレじゃない～

エルフィン： それにシュロもディアナも許したって言ってるし……

エルフィン： 私も許せると思うんだけど……？

ブラン： ……女王様のお考えはそういうことですね。

マカシャ： 検事側、さらに尋問することはありますか？

ブラン： エルフィン女王様がああおっしゃるのは理解できます。

ブラン： しかし今後このような被害が起きないように、適法な判決を要請します。

ブラン： 私は個人的に「120年デコピンの刑」を要請しますが、それに準じる処罰でも構いません！

マカシャ： 弁護人側、言いたいことはありますか？

シオン： 被害者側もみんな許しを望んでいる以上、寛大な処置をお願いいたします。

マカシャ： では、このあたりで攻防を終え、判決を下すことにします。

マカシャ： 判決に先立ち、最後にお聞きします。

マカシャ： ヴィヴィ、自分の過ちを後悔していますか？

---

## 【第4章：憎悪の向こう側への一歩】

まだ消えない憎悪

ヴィヴィの住処の近く

ネティ： うーん？ ここはどこでしょう？

ネティ： ぼーっとしながら歩いてたら、ここまで来ちゃったですう。

(キョロキョロ！)

ネティ： あ——！ どこかわかった気がするですう！

ネティ： この辺りにヴィヴィの住処があったですよね.....

ネティ： そういえば、今頃ヴィヴィの裁判結果が出た頃ですかね？

ネティ： 裁判があるって噂は聞いてたんですけど.....

ネティ： いい結果だったらいいですね。

ネティ： 誰が何と言おうと、ヴィヴィはダーヤ様と親しい仲ですし.....

ネティ： ゴールディを破って一時は2位にまで上り詰めた、竜族の誇りですからあ。

ネティ： うーん、考えてみたら〜？！

ネティ： ヴィヴィが留守にしているから、この辺りで思う存分遺物を発掘できるですう！

ネティ： ヴィヴィが長い眠りについてた時は、うっかり起こしちゃうかもしれないからこの辺の発掘は控えてたんですう！

ネティ： 目覚めてからは邪魔するなって追い返されてましたしい〜

ネティ： 今なら絶好のチャンスですう〜！

ネティ： ふふ〜ん！ 今日はなんだかいい予感がするですう〜

ネティ： 素敵な遺物が発掘できそうですう。

(ガガガッ！ ゴロゴロゴロ！)

しばらく後——

ネティ： うーん？ これは何ですう？

ネティ： 曲面、硬度、色合いまで.....これはどう見ても銀.....？ みたいですよ.....？

ネティ： おかしいですよ？ 鉱脈から出たにしてはかなりきれいで大きな塊ですよ.....

ネティ： まさか.....銀の竜族の卵.....？

ネティ： そ、そんなはずないですよ？ 銀の竜族はヴィヴィなんだから.....もう一体の銀の竜族が生まれるってことですか？

ネティ： ヴィヴィと同じ銀の竜族.....？

ネティ： エーリアスでは同じ鉱物の竜族が二体以上存在したことはないのに〜？

ネティ： .....ヴィヴィが本当に銀の竜族なのかですよ.....？

ネティ： うーん、とりあえずダーヤ様にお伝えしないとですよ？

#### 教団内部

マカシャ： ヴィヴィ、自分の過ちを後悔していますか？

ヴィヴィ： .....

ヴィヴィ： 私は.....

シオン： もちろんです！ 裁判長！ ヴィヴィは後悔しています。

マカシャ： 私は弁護人に聞いたのではありませんよ。

シオン： あ、私は弁護人として答えを.....

マカシャ： ヴィヴィ、あなたが答えてください。自分の過ちを後悔していますか？

ヴィヴィ： .....

マカシャ (心の声)： 答え次第で情状酌量を考慮してあげることもできるのだけど。

マカシャ： 後悔していると言った方がいいわよ。

シオン： ヴィヴィ、後悔してるって言って。

ヴィヴィ： .....

ヴィヴィ： .....いいえ、私は後悔なんかしていない！

シオン： ヴィヴィ.....！！

ヴィヴィ： 私は後悔していないと言ってるの！！

ヴィヴィ： 私の憎悪はその程度で簡単に消えたりしない！

ヴィヴィ： 私を指さして罵ってもいい！

ヴィヴィ：私が後悔していることは一つだけ！ 自分の手で復讐を遂げられなかったこと！

ヴィヴィ：すり鉢の魔女！ あなたなら、死が何かわかるでしょ？

ヴィヴィ：あなたが当事者だったら、すべてを許して水に流せるっていうの？！

ヴィヴィ：何もなかったかのように、ただ生きていけるっていうの？！

ヴィヴィ：私は.....私にはそれができないって言ってるの！

マカシャ：.....

マカシャ：あなたには一片の後悔も、罪悪感もないのですか？

マカシャ：あなたの盲目的な復讐心のせいで、罪のない者たちが被害を受けたというのに？

シオン：ヴィヴィ！ お願いだからやめて！ お願い.....！

ヴィヴィ：穴落としの刑？ 怖くも、恐ろしくもない！

ヴィヴィ：すでに一度死を経験した身よ。

ヴィヴィ：一片の後悔や罪悪感？

ヴィヴィ：今さら後悔したら、私の人生全てを否定することになるのよ！

ヴィヴィ：私はただ憎悪、憎悪だけで今まで耐えてきたのよ！

シオン：ヴィヴィ.....！！

マカシャ：あなたの意見はよくわかりました。

シオン：敬愛する裁判長.....！！

(ドサッ！)

シオン：裁判長、被告人が心神耗弱であることをご考慮ください！

シオン：ヴィヴィはとっくに後悔していると話したことがあります。

シオン：ただ感情表現に問題があるだけです！

マカシャ：お立ちください。ここは法廷です。

シオン：ここが法廷だろうと何だろうと、関係ない！

シオン：ヴィヴィは私にとって家族なの！

シオン：私はヴィヴィのためなら、何だってできる！

シオン：膝くらい何度だってつける！

シオン：法廷でいくらでも叫べるって言ってるの！

シオン：本当に久しぶりに再会した妹なの。

シオン：このまま別れたら、一生自分を責めて後悔し続けることになる。

シオン：私が責任を持って妹の面倒を見るから！

シオン：こんなことがないようにちゃんと教育するから！

シオン：言われたことは何でもするから！

シオン：お願い、頼むから、やっと会えた妹とこんな形で別れるなんてできない。

マカシャ (心の声)：.....

マカシャ：復讐心に目が眩んだ竜族と、幽霊の姿を模した姉か.....

マカシャ：判決を下すことにします。

マカシャ：この裁判において、あなたの罪は重い。

マカシャ：罪を犯しながらも反省していない点。

マカシャ：悪意を持って犯行を計画し実行した点。

マカシャ：これらの点を考慮すると、今すぐ極刑を下しても差し支えありません。

マカシャ：しかし、被害者たちが心を一つにしてあなたを許し、寛大な処置を求めました。

マカシャ：被害者たちが直接法廷に出席してあなたを許すと公言したのですから、これは社会的に事件が収束したと見るのが妥当です。

マカシャ：また、教主様もある程度酌量すべきだという意向を示されました。

マカシャ：復讐心に目が眩んで周りが見えなくなった、哀れで可哀想な竜族よ。

マカシャ：あなたの姉妹があなたを責任を持って世話することにしたのでですから.....

マカシャ：本裁判長もあなたの今後を見守ることにします。

マカシャ：今回の裁判は魔王王国の厳格な法律だけで判決を下すことができないため、これまで地上で起きた事件の処遇やエルフたちの法律などをすべて検討した結果.....

マカシャ：以下の判決を下します。

マカシャ：「懲役120年。執行猶予50年の宣告と同時に、社会奉仕命令3000時間」に処します。

マカシャ：加えて保護観察の条件として、教団で謹慎するように。

マカシャ：特別なことがない限り、教団で反省しながら過ごしてください。

---

## 【第5章 ——数日後——】

教団の客間

ヴィヴィ： .....

シオン： ヴィヴィ～そこにいる？ ダークブレットが来たよ～！！

シオン： あの、ヴィヴィ？

シオン： また一口も食べてないの？

シオン： 何か食べないと元気出ないよ.....

シオン： 何か、食べたいものは、ない～？

ヴィヴィ： ごめんなさい.....

ヴィヴィ： 私がすべてを台無しにしてしまった。

シオン： 違うよ、ヴィヴィ！

シオン： 裁判の結果は悪いものじゃないんだから？

シオン： 社会奉仕3000時間？ 1日10時間ずつ、300日で楽勝だよ！

シオン： さあさあ、とりあえず何かしっかり食べよう～

シオン： あ！ それと近いうちに姉妹たちにも会えるよ！

ヴィヴィ： 会いたくない.....

シオン： 大丈夫、みんな喜ぶよ！

ヴィヴィ： 会えない。会いたくないって言ってるの.....

???: ヴィヴィ、そこにいるか？

シオン： ん？ 誰～？

ヴィヴィ： .....ダーヤ.....モンド.....？

ダーヤ： 久しぶりだな、ヴィヴィ。

シオン： あなたは竜族の長？

シオン： 前に教団の騒動の時、狙撃しながらちらっと見た記憶がある！

ダーヤ： そなたは初めて見る顔だな。

ダーヤ： ヴィヴィの弁護を引き受けたという者がそなたか？

シオン： うん！ 今回ヴィヴィの弁護を担当したよ。

ダーヤ： ありがとう.....おかげでヴィヴィの裁判が無事に終わることができた。

シオン： ヴィヴィのことは私のことでもあるから。

ダーヤ： ところで、どうして我ら竜族を法廷に呼ばなかったのだ？

ダーヤ： 呼んでくれさえすれば、竜族みんなが駆けつけてヴィヴィを弁護したというのに.....

シオン： あ、それがつまり.....

シオン： .....ヴィヴィが呼ばないでって言ったから.....

ダーヤ： どうしてだ？ ヴィヴィ.....

ヴィヴィ： あんたの顔なんか見たくなかったからよ。

ダーヤ： ヴィヴィ.....！！

シオン： 違うの！ どういうことかって言うと！

ダーヤ： .....そう言うだろうとは思っていた.....

ヴィヴィ： わかったなら帰って。

シオン： ヴィヴィ、なんでそんなこと言うの？

シオン： 久しぶりに会った友達なんだから、もう少し親しくしてもいいじゃない。

ヴィヴィ： 会いたくないって言ってるの！

ヴィヴィ： うんざりなの！ あんたという竜族が！

ヴィヴィ： 顔も見たくないって言ってるのよ！

ダーヤ： 私がうんざりだと言うのか、ヴィヴィ。

ヴィヴィ： そうよ！ 私はあんたが嫌だった。

ヴィヴィ： 初めて会った時からずっと！

シオン： あ、あんまり気にしないで！ うちのヴィヴィは今、思春期？ 反抗期？ みたいなものだから！

ヴィヴィ： お姉ちゃん、席を外して。

ヴィヴィ： これは私とあっちが話すべきことよ。

シオン： .....ヴィヴィ.....

ダーヤ：私は構わないから、ヴィヴィの思うようにしてやってくれ。

シオン： あ、わかった〜ヴィヴィにあんまりきつく言わないでね.....私はまた後で来るから！

ヴィヴィ： 帰って、あんたと話することなんてない。

(スツ)

ヴィヴィ： 何？ 何してるの！

ダーヤ： .....一度は会わなければならないと思っていた。

ダーヤ： ずっと勇気が出なくて来られなかったが.....

ヴィヴィ： .....あんたが嫌いだって言ってるのに.....？

ヴィヴィ： いや、あんたは私には似合わない.....

ヴィヴィ： それにこれは私の問題よ、あんたには関係ない。

ダーヤ： どうしてそう思うのだ？

ヴィヴィ： .....あんたと私は.....何の関係もない.....

ダーヤ： 教主からおおよそお前の話を聞いた。

ダーヤ： すまなかった。お前が辛い時に、お前を一人にするべきではなかったのに.....

ヴィヴィ： どうしてあんたが謝るのよ。

ヴィヴィ： 理解できない.....お姉ちゃんも.....あんたも.....

ダーヤ： 私は是非を問いに来たのではないぞ、ヴィヴィ.....

ダーヤ： お前とまた昔のように話がしたかっただけなのだ。

ヴィヴィ： 無理よ、戻れない。

ヴィヴィ： 昔みたいにあんたとキャッキヤ笑いながらおしゃべりなんてできないのよ！

ヴィヴィ： 私は、私は.....最初から、最後まで嘘ばかりだったの！

ヴィヴィ： 最初からあんたを利用するために近づいたのよ！！

ダーヤ： .....そうせざるを得ない理由があったのだろう.....

ヴィヴィ： そもそも私は銀の竜族ですらなかったのよ！

ダーヤ： 知っているぞ、ヴィヴィ。

ヴィヴィ： .....知ってたの.....？

ダーヤ：数日前、ネティがお前の住処の近くを掘っていたら、卵を一つ見つけたのだ。

ヴィヴィ：な、何ですって？

ダーヤ：銀色に輝く、美しい卵だった。

ダーヤ：見た目は.....お前が生まれたと言っていた銀の属性と変わらないように見えたから、確認してみた。

ダーヤ：.....エルフの研修医がこう言った。

ダーヤ：その卵が本物の銀だと。

ダーヤ：そしてお前は.....偽物だと.....な。

ヴィヴィ：そうだったの.....銀脈のある場所を守っていれば、大丈夫だと思ってたのに.....

ヴィヴィ：結局、こうやってバれてしまった。

ヴィヴィ：どう？ 嘘にまみれた私の姿を見て？

ヴィヴィ：おかしい？ 醜い？

ヴィヴィ：表面上は高貴なふりをしてるけど、真実はこの有様だから。

ヴィヴィ：もう私のことがわかったでしょ？

ヴィヴィ：私はもともとあんたが思うような高潔な竜族じゃないのよ。

ヴィヴィ：思う存分軽蔑して嘲笑えばいいわ。

ダーヤ：お前が銀の竜族であろうとなかろうと、私を利用しようとしたかどうかなど、関係ないのだ。

(スッ!)

ヴィヴィ：な、何？ 何してるの？

ダーヤ：銀の竜族の卵だ。

ヴィヴィ：そんなの知ってるわよ？ なんで私に渡すのよ？

ダーヤ：お前が世話をしろ、贖罪の意味で。

ダーヤ：お前のせいで今まで世の光を見ることができなかった子に。

ダーヤ：そして待っている。いつでも、どれだけ時間がかかっても。

ダーヤ：気持ちが落ち着いたら戻っておいで。

ダーヤ：あの場所、あの席で待っている。

ダーヤ： 家族とはそういうものだから。

ヴィヴィ： .....

ヴィヴィ： う.....

ヴィヴィ： う.....ふう.....ひっく.....

ヴィヴィ： うわああん——！！ うわああん！！

ヴィヴィ： ごめんなさい、私でごめんなさい——！！ ダイヤモンド.....！！

ヴィヴィ： こんなダメな私でごめんなさい。

ヴィヴィは長い間ダーヤの胸に抱かれて涙を流した。そして疲れ果てて倒れ、久しぶりに深い眠りについた。

### 世界樹教団の花壇

教主： ヴィヴィの様子はどう？

ダーヤ： 泣き疲れて眠ってしまった。

ダーヤ： ひどくやつれていて、見ているこちらまで胸が痛んだ。

ダーヤ： それでもおかげでうまく仲直りできた。

ダーヤ： ありがとう、教主。あなたがヴィヴィの消息を伝えてくれて、一度会ってみてくれと言ってくれなければ.....

ダーヤ： .....とても勇気が出なかつたらろう.....

教主： いや、こちらこそありがとう。

ダーヤ： 教主、今回の裁判にも力を尽くしてくれたと聞いた。

ダーヤ： これからもヴィヴィをよろしく頼む。

教主： うん、それは心配しないで。

教主： 誰が何と言おうと、ヴィヴィは僕の使徒でもあるからね。

ダーヤ： あ、それと教主、ヴィヴィに卵を一つ預けた。

教主： 卵？

ダーヤは教主に銀色の卵の発見と、ヴィヴィにその卵を預けた経緯を説明した。

教主： そうしたことだったんだ.....

ダーヤ： 贖罪の意味で預けたのだ、どうか理解してほしい。

教主： そうだったんだね。とりあえずわかったよ。

教主 (心の声)： 卵の世話をするのも一種の奉仕活動だから、奉仕時間から差し引いてあげるべきかな？

---

## 【第6章：まだ終わらない危険】

教団の客間

数日後——

シオン： うわああっ——！ な、なにこれえ？！

ヴィヴィ： ど、どうしたんですの？！

シオン： ヴィヴィが卵を産んだなんてえ——？！！

ヴィヴィ： え？ わたくしが何を産みましたの??

シオン： その卵！ その卵は一体何なの???

教主： シオンはまだ卵のことを聞いてなかったんだね。

ヴィヴィ： あ、この銀色の卵のことですか？

教主： 数日前、ダーヤがヴィヴィに竜族の卵を預けたんだって。

ヴィヴィ： その通りですの。ダイヤモンドがわたくしに卵を預けましたの。

ヴィヴィ (心の声)： ダイヤモンドも一体何を考えているのやら.....

ヴィヴィ： これは銀の竜族の卵ですの。

シオン： そ、そうなんだ.....

ヴィヴィ： それはそうと、教主様はどのようなご用件でわたくしをお訪ねですか？

教主： うん、元気にしてるか確認しに来ただけだよ。来る途中でシオンに会ったから一緒に来たんだ。

シオン： ねえ、ヴィヴィ。聞きたいことがあるんだけど.....その卵、どういう経緯で預かることになったの？

ヴィヴィ： ダイヤモンドが銀の竜族を優雅で気品ある竜に育てたいとおっしゃったんですの。

ヴィヴィ (心の声)： 贖罪の意味で卵を預けたんでしょうけど、これはお姉ちゃんには話したくないわ.....

ヴィヴィ：熟考の末、ダイヤモンドがわたくしに頼んだんです。わたくしなら、誰よりも銀の竜族をレディーとして立派に育てるだろうと。

ヴィヴィ：ダイヤモンドもさすが見る目がありましたの！ すべてはわたくしが優雅〜で気品があるからこそ、預けたのではありませんこと？

ヴィヴィ (心の声)：う、これを一体どうやって世話すればいいのか.....

教主：ヴィヴィの奴、やっぱり負担に感じてるみたいだな.....

シオン：それでまた、そういうことになったのか.....ところでヴィヴィ、あなた話し方が.....

教主：そういえば、元の話し方に戻ったんだね。

ヴィヴィ：わたくしの話し方がどうかしましたの？

シオン：いや、その前みたいに独特になったというか？ 上品になったというか？

ヴィヴィ：おーほほほ！ お姉ちゃんから見ても上品に見えますの？ これが元々のわたくしの話し方ですの！ 高貴でありながらも優雅〜さが自然と身についているのですわ！

シオン：そんな気もするし.....

シオン (心の声)：ああ、そういうコンセプトなのね.....！

ヴィヴィ：あ！ そういえばお二方！ お入りになる時、何か届いたもの見ませんでしたの？

教主：ん？ 何か注文でもしたの？

シオン：配達？ 部屋の前に何か大きな荷物みたいなのが一つあったけど？

ヴィヴィ：おーほほほ！ 思ったより早い配達ですわね！

シオン：な、何これ？！

教主：うーん、まさか？

ヴィヴィ：エルフたちの都市で購入したベビーカーというものですの！ それと卵を扱う時は気をつけなければなりませんから、手袋も一つ注文しましたの！

ヴィヴィ (心の声)：わたくしの水銀が触れたら卵が傷むかもしれないから.....

ヴィヴィ：慎重に持ち上げて移しましょう。

ヴィヴィ (心の声)：ダイヤモンドにもう一度認められるのよ。そうすれば.....全部やり直せる.....

ヴィヴィ：ここにこうやってのせてあげれば.....優雅に〜一緒にお散歩もできますの！

シオン/教主：.....

ヴィヴィ：どうしましたの？

シオン： い、いや！ 似合ってるね！ ははは

教主： うん、なかなかいい感じかも.....

シオン： これが「銀の竜族の卵」なんだよね？

ヴィヴィ： その通りですよ！

教主： すごく神秘的な雰囲気だね。

シオン： ふーん、確かにそうだね。

教主： いつ頃孵るの？

ヴィヴィ： それは.....わたくしにもわかりませんの。時が来ればちゃんと孵るのではありませんこと？

シオン： あ！ 私にいい方法を思いついた！

**【掲示板の投稿】** ダークブレットさんの投稿：小さすぎてただ丸っこい形をしている友達に聴かせる音楽を推薦してほしい。

**【コメント】** イパスータスマさんのコメント：こいつに何の音楽だよ？ 絵本でも読んどけ。

ヴィヴィ： 何をそんなに見てるんですの？ まさかダークネットとかいうのをやってるんじゃないでしょうね？

シオン： あはは、ちょっとね～

**【コメント】** レボリューション10さんのコメント：ヘビーメタル、「エンター・サンド・ドラゴン」おすすめする！

**【コメント】** 最強キングゴッド存在さんのコメント：これどう？ ネカフェでゲームする時に聴くといいよ！

**【コメント】** ダークブレットさんのコメント：今から変な音楽を推薦した奴は1時間BANだ。

ヴィヴィ： な、何かあったんですの？

シオン： ううん～ちょっとあきれることがあっただけ.....

教主 (心の声)：シオンもヴィヴィも元気にしてるみたいだな。ヴィヴィは卵を預かって負担に感じてるみたいだけど、責任感を持って世話してるみたいだし。

シオン： あ、そういえばヴィヴィ.....私、今日姉妹たちに会うことになってるんだけど、一緒に行かない？

ヴィヴィ： .....それが.....わ、わたくしは今日忙しい用事がありまして.....まだ姉妹たちに会うには.....

シオン： あちゃちゃ！ 奉仕活動で忙しいよね～わかった、ヴィヴィ。次に機会があったらみんなで会おう。

ヴィヴィ： そうですわね.....次に機会があれば.....

教主： ねえ、ヴィヴィ。

ヴィヴィ： 何でしょう？ 教主様？

教主： 明るく見えて安心したよ。

ヴィヴィ： .....裁判も終わったのに落ち込んでする必要がありますの.....？

ヴィヴィ (心の声)： .....お姉ちゃんのためにも明るくしなきゃ.....

教主： ヴィヴィなら、うまく世話できるよ。

ヴィヴィ： まあ、わたくしほど優雅なレディーはいませんものね。

教主： じゃあ、元気でね。何かあったら気軽に訪ねておいで。

ヴィヴィ： あの.....

教主： どうしたの？

ヴィヴィ： .....なんでもありませんの.....ありがとうございます.....お姉ちゃんも、教主様もお気をつけてお帰りくださいませ。

### 【荒野】

アイシア： 座標通りに来たけど、この辺りで合ってるの？

エルフの秘書： はい、位置的にはほぼ到着しています。

アイシア： はあ、ここはどこ見ても見渡す限りの荒野じゃない。変な物体に座標が打ってあったから来たのに.....よりによって、こんな荒野だとはね.....もう一度録音を聞いてみよう。

リニューア (R41) (録音)： よし、ついにこの次元での座標値を特定した。.....すべては計画通りに進行しているから、ついにここも予定された手順を踏むことになる.....！ ははは——もう終わりだ！ このうんざりする次元をついに終わらせることができる！！

アイシア： 一体、何があるからってここまで録音までしたのよ？ ねえ、何かありそう？

エルフの秘書： え？ 私ですか？

アイシア： じゃあ、ここにあんた以外に誰がいるの？

エルフの秘書： あ、それが.....何か重要なものがあるんじゃないでしょうか？

アイシア： 重要な何かだからこうやって座標まで残したんでしょ！ もっと想像力を働かせなさい

よ！ 想像力を！

エルフの秘書：じゃあ、宝物.....？

アイシア：そうやって適当に言って外れたら、どう責任取るつもり？

エルフの秘書：て、転職でもした方がいいでしょうか？

アイシア：何ですって？ あんたは転職が簡単なの?! あんたは私がクビにするまでどこにも行かないで！ 一生うちの会社でくすぶってなさい！

エルフの秘書：あ、わかりました！

アイシア：そういえば私が集めた情報によると.....この前あの白蛇の奴も何か宝物を集めてたっけ.....とにかくこのメチャクチャなファンタジー世界、遺物をちょっと集めたら強くなるんだから

エルフの秘書：該当の座標が打たれた場所に到着しました。あれ？ 会長、あそこを見てください！

アイシア：ん？ あれは何？

エルフの秘書：何かお墓のように見えます。

アイシア：私にだって目はあるわよ？ でも死なないファンタジー世界でなんでお墓があるのよ？

エルフの秘書：そうですね。何か気味が悪いですね.....

アイシア：それでも入らないと。ここまで来て手ぶらで帰れないでしょ。

次の物語へ――

---

## 【第7章：食い違う意見】

エピカ：会えて嬉しいぞ〜！ 姉妹が一堂に会するとは、なんと喜ばしいことか？！

シオン：みんな久しぶりに再会したね！ こんな嬉しい日にはパーティータイムでもしなきゃいけないんじゃない？

アヤ：ねえ、シオン。ヴィヴィの裁判のことは聞いたよ。うまくいったんだよね？

シオン：うん！ まさに手に汗握る裁判だったよ！ 逆転に次ぐ逆転〜！！ どんでん返しに次ぐどんでん返しの裁判〜！！

エピカ：おお！ 話を聞くだけでも興味深いな！

クロエ：四番目のお姉ちゃんは法廷で大声で啖呵を切って、後悔しないって言い張ったんでしょ？

シオン：.....うん。そういうことはあったけどね。

クロエ：全然理解できない。一体なんでそんなことしたの？

シオン： ヴィヴィにとっては自分のしたことが一種の使命のように感じられてみたい……たぶん私たち姉妹のためにそうしたんじゃないかな？

クロエ： 私たちのために？ ちょっと待って……じゃあ私たちが生きてることも知ってたってこと？ なんで探しに来なかったの？ 行方不明の姉妹を探してるって教団にあれだけ告知を出してたじゃない。それを見てないはずがない。いや、そもそも四番目のお姉ちゃんは私たちを探そうとしたの？

シオン： ……遠くから見守ってたんだって。自分のことに姉妹たちを巻き込みたくなくて。

クロエ： は？ それが言い訳になると思ってるの？

アヤ： クロエ、少し興奮してるみたいだよ。

クロエ： ……はあ～、とにかく変わり者なんだから。

アヤ： 私がもう少し早くヴィヴィを見つけていたら……ヴィヴィが道を外れなかったかな？

クロエ： 意味のない仮定だよ。

エピカ： それはクロエ社長の言う通りだな。あまり自分を責めなさるな、賢者殿。

イード： そうだよ。お姉ちゃんは最善を尽くしたじゃない。お姉ちゃんが四番目のお姉ちゃんを探そうとしても、たぶん四番目のお姉ちゃんが知らんぷりしてたと思うよ。

シオン： あ！ そういえばもう一人来ることになってたんだ！

イード： え？ ……誰が来るの……？

エピカ： 誰がまた来るのだ？

シオン： みんなのためにサプライズ～を用意したんだ！ それは！ 私たちの可愛い末っ子だよ！

アヤ： 末っ子？ 本当に末っ子が来たの？

シオン： うん～！ 教主がくれた情報を手がかりに探し回って末っ子を見つけたの！！ ウイ！ みんなに挨拶して！

ウイ： やあ！ みんな？ 会えて嬉しいよ！ ウイっていうんだ！

アヤ： 末っ子……本当に末っ子なの？

クロエ： あなたが本当に末っ子なの？

アヤ： シオン、これは……どうということ？

シオン： あ、それがつまり……うう、前もって言うべきだったんだけど……バタバタしてて忘れちゃって……！ 末っ子……つまり、ウイはエピカみたいに記憶を失ってるの。

エピカ： ふむふむ、拙者と似た境遇とは.....心が痛むな.....

アヤ： どうして.....やっと会えたのに.....記憶を取り戻す方法はないかな.....？

クロエ： 末っ子、本当に私たちが誰かわからない？ 私だよ、五番目のお姉ちゃん、クロエ！

ウイ： ごめん、よくわからないよ、五番目のお姉ちゃんのお友達.....

クロエ： そうなんだ.....あの時私が.....イードと末っ子が目覚めるまで待っていたら.....

ウイ： みんな幸せそうじゃないね.....

アヤ： 末っ子は.....どうして記憶を失ったの？

シオン： ヴィヴィが言うには、末っ子が不幸から逃げるために記憶を消したみたいだって.....

ウイ： ウイはよく覚えてないけど、そうかもしれないって思うよ。

シオン： そ、それでも末っ子まで見つかったんだから、これで七姉妹全員が集まれるじゃない。それで考えたんだけど.....ヴィヴィの裁判も終わったし、サプライズパーティーを開くのはどうかな？

クロエ： ちょっと待って.....！

シオン： え？ どうしたの？ クロエ？

クロエ： 今なんて言った？ 姉妹同士でささやかにでもパーティーしようって？ いや、その前に。ヴィヴィが言うには末っ子が記憶を消したみたいだって言ったよね.....？

シオン： う、うん、そ、そうだけど？

クロエ： じゃあ、ヴィヴィは全部知ってたってこと？ 末っ子が記憶を消したことも、ウイっていう精霊が末っ子だったってことも。

シオン： .....そうだね.....？

クロエ： 無責任よ。無責任だって言ってるの！ 復讐に目が眩んで末っ子の面倒すら見なかったってことじゃない。ヴィヴィは姉妹が誰かも全部知ってたんでしょ？ それなのに一度も会いに来なかったじゃない！ 結局、私たちより復讐の方が大事だったってことでしょ？

シオン： だからそれはヴィヴィが傷ついてたから.....

クロエ： お姉ちゃんはそうやってかばうのやめてよ！ 傷ついてるのは私たちみんな同じじゃない。

アヤ： .....ク、クロエ、落ち着いて.....

エピカ： そ、そうだ！ 少し落ち着きなさい！ クロエ社長！ 興奮しすぎだぞ。

ウイ： う、ウイが何かいけないことしちゃった？

シオン： もう、本当に！ ちょっと！ クロエ！ ずっとそんな言い方するつもり?!

クロエ： は？ 私が何か間違っただこと言った？

シオン： じゃあ何、一生会わないつもり？

クロエ： ヴィヴィが会わないって言うんだから、そうなるかもね！ 今までヴィヴィがいなくても元気にやってきたじゃない！

シオン： その言い草ったら本当に！

アヤ： 落ち着いて、二人とも！

エピカ： そうだ！ 二人とも少し落ち着きなさい！

クロエ： お姉ちゃんたちがいつもよしよし甘やかすから、ヴィヴィがああなるんでしょ！ ヴィヴィがしたことを考えてみなよ！ 二番目のお姉ちゃんこそ、誰よりもヴィヴィがしたことを知ってるでしょ！ それでもかばうの？

シオン： 私たちは姉妹じゃない！ 姉妹同士は助け合うべきでしょ！

クロエ： 姉妹だから何！ 無条件に味方しなきゃいけないの？ 悪いことしても全部かばってあげなきゃダメなの？ 私はヴィヴィが軽い処罰で済んだことすら理解できないのに！

シオン： もう知らない！ 好きにして！ ヴィヴィにも会わないで！ パーティーも開かないで！ いっそお互い一生顔を合わせないで生きよう！ これで満足？ スッキリした？

(シオン退場)

イード： い、行っちゃった.....

エピカ： あんなに怒るのは拙者も初めて見たな.....

クロエ： .....みんなごめん。今日はもう帰って。あとで、あとで.....話そう。

エピカ： クロエ社長.....本当にこのまま帰れと言うのか？

アヤ： .....今日はこのへんで帰ろう。クロエにも一人になる時間が必要だと思うから.....

アヤ： .....クロエ、気持ちの整理がついたらいつでも呼んでね。シオンには必ず謝ってね。帰ろう、ウイ。

ウイ： うん。わかったよ。一番目のお姉ちゃんのお友達！

(アヤ、ウイ、エピカ退場)

クロエ： .....

セバスチャン (人形)： 大丈夫.....？ クロ.....エ.....？

クロエ： よく.....わからない.....

**(場面転換：妖精王国の食堂街)**

**エピカ**：クロエ社長、あのままにしておいて大丈夫だろうか.....なんというか、危なっかしく見えたが。

**アヤ**：時間がすべてを解決してくれるわけじゃないけど.....時には一人の時間が必要な時もあるから。

**エピカ**：まあ、姉妹というものはケンカしながら成長するものではないか？

**イード**：甘かったよ。みんな久しぶりに会えば、笑顔で仲良くできると思ってたのに.....

**アヤ**：昔のように戻るには、あまりにも多くの時間が過ぎたから。それでも姉妹同士でお互いの居場所がわかったんだから、まだ希望は残ってると思うよ。

**エピカ**：その通り！ いつかはみんな仲直りするに違いない！ ところでシオンお姉さんはどこへ行ったんだ？

**ウイ**：みんなあそこ見て！ ウイが黒い幽霊の友達を見つけたみたい！

**ウイ**：ここにいたんだ！ 黒い幽霊の友達！

**イード**：お姉ちゃん、大丈夫？

**シオン**：みんなごめんね。久しぶりに集まったのに、私が全部台無しにしちゃった。

**アヤ**：クロエもヴィヴィを受け入れるのに時間が必要だと思うよ.....

**シオン**：.....そうかな.....

**ウイ**：なんでみんな幸せそうじゃなかったのかな？

**シオン**：姉妹だからだよ。もともと姉妹はケンカしながら育つものじゃない。

**ウイ**：そうなんだ。黒い幽霊の友達は、ウイが他の友達と姉妹だって言ったけど.....ウイは全然覚えてない.....今日もやっぱりウイのせいでケンカになったんだよね？

**シオン**：違うよ、ただ昔に戻るにはまだわだかまりがたくさんあるからだよ。

**ウイ**：.....そうなんだ.....ねえ、あのさ.....黒い幽霊の友達！ ウイがお願いしたいことがあるんだけど、聞いてくれる？

**シオン**：ん？ 何のお願い？

**ウイ**：ウイが白い竜族の友達に会えるようにして！

**シオン**：白い竜族の友達？ ヴィヴィのこと？

**ウイ**：うん！ ウイは白い竜族の友達が元気にしてるか気になるの！

シオン： うーん、ヴィヴィは姉妹に会いたがってる様子じゃなかったけど.....

アヤ： ねえ、シオン？

シオン： ん？ なに？ お姉ちゃん？

アヤ： ウイをヴィヴィに会わせてあげよう。

シオン： 本当にそれでいいの？

アヤ： あの二人は前から仲良くしてたって聞いたよ。ヴィヴィもつらい時期だから、もともと親しかったウイに会わせてあげれば、お互いの力になるんじゃないかな？

エピカ： おお～それはいい考えだな！ もともと固く閉ざされた心は友の助けで開けるものだ。

シオン： うーん、まあ.....その言葉は間違っていないと思うけど.....

ウイ： お願い、黒い幽霊の友達！ ウイ、白い竜族の友達が心配なの。前に別れてからずっと会いたかったし.....

シオン： うーん.....わかった！ いいよ！ ヴィヴィに会わせてあげるね！

ウイ： うん！ ありがとう！ 黒い幽霊の友達！